

特定非営利活動法人グラウンドワーク三島

平成 27 年度「英国スタディ・ツアー」報告書

日程：平成 27 年 9 月 10 日（木）～9 月 17 日（木）



特定非営利活動法人 グラウンドワーク三島



〒411-0857 静岡県三島市芝本町 7-11

TEL: 055-983-0136 FAX: 055-973-0022

E-mail: info@gwmishima.jp

Website: <http://www.gwmishima.jp>

平成 27 年度「英国スタディ・ツアー」報告書

目 次

1. 概要	1
2. 日程表	1
3. 地図	1
4. 参加者・面談者リスト	2
(1) 参加者	
(2) 同行指導者	
(3) 面談者	
5. 報告事項（訪問先別）	
(1) 社会的企業タウン・Alston Moor（阿部 一成、五十嵐 雄大）	4
(2) 湖水地方（池田 麗菜、石岡 真由美）	6
(3) 英国ナショナル・トラスト、コッツウォルズ （植松 宗一郎、太田 裕也）	9
(4) グラウンドワーク・ロンドン、バイクワークス （岡野 英行、中溝 舞）	12
(5) The Conservation Volunteers（鈴木 大貴、橋爪 亮）	19
(6) まとめ（三浦 峻太、山田 喜昭）	22
6. 英国スタディ・ツアーに参加して（小島 恵）	26
7. 参加者へのメッセージ（小山 善彦）	27
8. 講評（渡辺 豊博）	29

1. 概要

平成 27 年 9 月 10 日（木）から 9 月 17 日（木）までの 8 日間にわたり、グラウンドワーク三島主催「英国スタディ・ツアー」が実施されました。

本ツアーは、グラウンドワーク・ロンドンを始めとして、英国の NPO や社会的企業への視察と具体的な活動への参加や体験を通して、多様な生活現場における問題解決力とコミュニケーション力、実践力を高めるとともに、国際的な交流と見識を高めることを目的として実施されたものです。参加者は、大学生 10 名、大学院生 1 名、社会人 2 名の計 13 名でした。

この度、各訪問先や視察を通しての感想や学んだことなどを、報告書にまとめました。

2. 日程表

日付	行程
1 日目 9 月 10 日 (木)	(参考：10:55 成田空港発 → 15:25 ヒースロー空港着) ヒースロー空港集合、リバプールへ（ほぼ全行程貸切バスで移動） リバプール泊
2 日目 9 月 11 日 (金)	終日：社会的企業タウン アルストン・ムーア訪問 湖水地方泊
3 日目 9 月 12 日 (土)	午前：湖水地方、フットパス散策体験 バーミンガム泊
4 日目 9 月 13 日 (日)	終日：ストラトフォード・アポン・エイボン、コッツウォルズ地方視察 ロンドン泊
5 日目 9 月 14 日 (月)	午前：グラウンドワーク・ロンドン視察 インターンシップ・環境活動体験（クイーン・エリザベス・リジビック・パーク） 午後：社会的企業 バイクワークス訪問 ロンドン泊
6 日目 9 月 15 日 (火)	午前：The Conservation Volunteers 活動体験（リージェンツ・パーク） 午後：まとめ ロンドン泊
7 日目 9 月 16 日 (水)	解散 (参考：13:30 ヒースロー空港発 → 翌 9 月 5 日 (日) 9:10 成田空港着)

3. 地図



4. 参加者・面談者リスト

(1) 参加者（敬称略）

No.	氏名	性別	所属	備考
1	阿部 一成	男	都留文科大学 3年	大学生
2	五十嵐 雄大	男	都留文科大学 3年	大学生
3	池田 麗菜	女	都留文科大学 3年	大学生
4	石岡 真由美	女	都留文科大学 3年	大学生
5	植松 宗一郎	男	都留文科大学 3年	大学生
6	太田 裕也	男	都留文科大学 3年	大学生
7	岡野 英行	男	東京農工大学 2年	大学生
8	小島 恵	女	都留文科大学 講師	社会人
9	鈴木 大貴	男	都留文科大学 1年	大学生
10	中溝 舞	女	東京農工大学 4年	大学生
11	橋爪 亮	男	早稲田大学 大学院 2年	大学院生
12	三浦 峻太	男	都留文科大学 3年	大学生
13	山田 喜昭	男	（一般参加）	社会人

（五十音順）

(2) 同行指導者

No.	氏名	所属	備考
1	小山 善彦	バーミンガム大学客員講師、 グラウンドワーク三島 英国アドバイザー	通訳
2	渡辺 豊博	グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長、 都留文科大学文学部社会学科教授	引率・指導
3	山本 実生	グラウンドワーク三島 事務局	同行

(3) 面談者

日時	訪問先／面談者
9月11日(金)	Cyber Moor / Mr. Daniel Heerly, a member of Cyber Moor
	South Tynedale Railway in Alston Moor / Mrs. Sue Gilbertson, a member of South Tynedale Railway
9月12日(土)	Lake District / Dr. Robin & Mrs. Chris Henshaw OBE, グラウンドワーク三島 シニアアドバイザー
9月14日(月) 午前	Groundwork London / Mr. Terry Sinclair, H&R Manager Mrs. Nicole Muris, Operations Manager
9月14日(月) 午後	Bikeworks / Mr. Jim Blakemore, Co-Director
9月15日(火)	The Conservation Volunteers / Mrs. Lizzy Kaimakamis, Operations Leader



9月14日(月)午前
グラウンドワーク・ロンドン職員による講義の様子(「Tree x Office」前にて)

9月15日(火)
The Conservation Volunteers 主催のボランティア活動を体験
(リージェンツ・パークにて)

5. 報告事項（訪問先別）

(1) 社会的企業タウン・Alston Moor—Daniel Heerly 氏の講義を受けて—

（担当：阿部 一成・五十嵐 雄大）

1) 組織の概要

人口約 2500 人のイギリスのカンブリア地域の東端に位置するアルストン・ムーアは、20 世紀初頭には鉛の生産による鉄鋼業と農業の兼業スタイルによって栄えた街である。しかし、1950 年代になると資源の枯渇、そして鉱物資源に代わる新たな資源の普及により鉱山は閉山され、過疎化による衰退が加速した。この問題に際し、近年社会的企業の数多くの誘致、またはソーシャルエンタープライズによって、地域の住民自身による独自のサービスの進化等の内的発足を促し、現在世界から注目を集めている。

2) 学習概要

都留文科大学 3 年 阿部 一成

成功のキーワードは「共同」と「自立」である。私にはダニエルさんのこの言葉が大変印象的であった。外からのアプローチに期待し、待ち続けるだけでは成功は有り得ない。そこに住む地域住民が主体となって一つになった時、初めて何らかの成果が期待出来る。今回お話をうかがったことで改めてこの考えに思い至った。

まず特筆すべきことは、このアルストン・ムーア地区では、ソーシャルエンタープライズと呼ばれる取り組みによって、過疎が進行する地区にも関わらず、20 以上の社会的企業を誘致することに成功している点である。大手企業や政府ではなく、社会的企業を地域に呼び込むメリットは数多くある。

その最たるものが地域住民の理解である。例えば、農家の土地にブロードバンドの光回線を引く場合、大手の企業は住民から反対を受けやすいが、これが社会的企業であるとはるかに受け入れられやすい。また、行政のそれとは異なるサービスによって、かかるコストも大幅に削減することが出来る。

主体はあくまでその地域に住む住民である。ビジネス等何か新しいことを始める時、まず目を向けるべきは、外ではなく内の人材である。対象のスキルを持った人は、大抵の場合地域の中に住んでいるというお話には、大変感銘を受けた。住民の意識を変革し、モチベーションを高めることが何よりも、地域復興の機運を高めることに繋がるのである。

それでは一体何をもってすれば、住民の意識を変革が可能なのであろうか。それがこのアルストン・ムーアでは社会的企業を巻き込んだ多種多様なビジネス展開なのである。街の中のちょっとした出来事や流行をチャンスとして認識し、ビジネスを起こす姿勢が何よりも重要だ。

私は今回実際にアルストン・ムーアを訪れ、多くのお話をお聞きしたことで新しい知識や見聞を広めることが出来たのはもちろんだが、同時にその根本の軸は、日本のグラウン

ワーク三島で学んでいる理念とほとんど大差ないことに気づいた。共同や自立といった言葉は、渡辺先生も常日頃からよく口にする言葉である。アルストン・ムーアで学んだことを常に念頭に置き、これからより一層グラウンワーク三島の現場で多様な実践的な学びを深めて、それを将来、故郷に戻った際に社会還元したいと強く思った。

都留文科大学 3年 五十嵐 雄大

現在のアルストン・ムーアの主な産業は「ツーリズム」である。大きな街から 50 km 以上も離れた場所に位置しているにもかかわらず、毎年多くの観光客が訪れている。中世の頃から変わらない町並みや建造物が人気を呼んでいるためである。この点において、かつての町並みを観光資源として活用しているイギリスと日本の共通点であると感じた。しかしソーシャルネットエンタープライズの普及や最新のインフラ整備を行ないながらも、それらを感じさせないでいた。

イギリスでは、日本以上に建造物や景観に対して、外見や大きさなど多くの制約が存在している。こうした条件下においても、景観を崩すことなく、都市部にも劣らない発展を遂げていることは非常に驚きであり、日本でも、こうした事例をもとに地方の状況に合わせて変化を加えながらこのような活動を取り入れ、地方再生に繋げていくべきであり、そのために私たちがどのように考え、行動に移すべきであるかを考えさせられた訪問であった。



アルストン・ムーアの Town Hall での講義



街並み



アルストン・ムーア駅にて



現在は 300 人が住む小さな町 Nenthead を訪問

(2) 湖水地方

(担当：池田麗菜・石岡真由美)

1) 湖水地方の概要

私たちが担当したのは、イングランド北西部ウェストモーランド・ガンバーランド郡・ランカシャー地方にまたがる「湖水地方」という地域で、ほとんどを Robin Henshaw さんご夫妻に案内していただいた。

湖水地方は多くの湖が点在する地域であり、多相山の少ないイギリスに於いて「山」と呼ぶ標高 1000m 近い山々が連なり、起伏に富んだ自然が見られる場所として知られている。その景観は時が止まったように、現在も 200 年前と変わっていない。湖水地方の景勝は、幾世紀にもわたって多くの詩人や芸術家たちを魅了してきた。

また、その静けさと落ち着いた佇まいは、来訪者に珠玉の思い出を残してやまない。ビアトリクス・ポターも湖水地方に暮らした著名人のひとりである。世界中の子供たちに愛され続ける小さな絵本シリーズと、何より愛らしいキャラクター、ピーターラビットが生まれたのは、湖水地方に対するビアトリクスのひたむきな愛があつてこそであった。

さらに、詩人ウィリアム・ワーズワースはアルズウォーターの湖畔を散策している折の感動から「水仙」をしたためた。その光景は、春になると、今日でもそこかしの湖岸で目にすることができる。偉大な美術家にして著述家、またアーツ・アンド・クラフツ運動の創始者であったジョン・ラスキンも、その最も有名な作品はこの土地の壮大な景観に着想を得ている。イギリスが誇る比類のない景勝美がここにあるのである。

2) 学習概要

都留文科大学 3年 池田麗菜

今回の英国スタディ・ツアーに初めて参加させていただいた。自分で英国を訪れるのは足を運ぶことができない場所に行くことができ、貴重な体験やお話を聞いたことで、本ツアーに参加して本当に良い経験になった。

私はまちづくりについては、とても興味を持っている。英国では環境保護や様々な活動が行われており、その活動は日本よりはるかに先進的である。そのような活動を実際に見て日本でも生かすことができればと思い英国に向かった。

あるものをどう活かすか、どのようにして守っていくのかなど英国での活動について様々な方からお話を伺ったが、英国で行われている活動は日本では成功しないように感じた。英国と日本では異なる部分（国民性等）が多すぎるからである。

そして、英国で行ったボランティア体験では、参加者同士の交流や途中のティーブレイク、そして最初と最後の準備運動やクールダウンなど終始和やかな雰囲気で行われていた。日本でもこのような雰囲気で活動ができればよいのではないかと感じた。

また、二日目には宿泊したホテルの横にある森の中をロビンさん御夫妻に案内していた

だいた。ロビンさんもその森に入るのは初めてだったそうなのだが、そうは感じさせないほど知識が深く、スタディ・ツアー参加者からの質問にも詳しく答えてくださった。

その後、ロビンさん御夫妻のお話の中では「国内旅行が趣味で、まだまだ国内に学びがある。」と仰っていた。この言葉を聞いて、こんなにたくさんの知識があり、多くの経験をされている方が学ぶことをやめず、それを楽しんでいることにとても驚いた。そのような方から英国について学ぶことができたことは、本当に貴重な経験であった。

自分は、まだ学生で学びを職とする身分であるので、ロビンさん御夫妻のように海外でも日本国内でも、まだまだ多くのことを学ばなければならない。自分の興味関心のある事（まちづくりについて）をもっと学ぶために、まずは身近なところからでも国内外様々な場所に足を運び、多くのことを知りたいと感じた。

そして、またスタディ・ツアーへの参加や、自主的に英国を訪れてみたいと感じた。このような機会を提供してくださった皆様、本当にありがとうございました。

都留文科大学 3年 石岡真由美

今回、二度目となった英国スタディ・ツアーでしたが、普通の観光目的だけではできない貴重な体験をすることができました。廃村になった田舎を社会的企業タウンとして再生し、地域の活性化に成功した「アルストン・ムーア」や英国ナショナル・トラストが、政府から独立した独自の資金確保と管理システムにより保全している世界自然遺産の「湖水地方」「コッツウォルズ地方」。また「グラウンドワーク・ロンドン」が取り組む多様なプロジェクトの視察と体験を通し地域における実践的な手法を学ぶことができました。

多くの刺激と学びの中で、特に、感じたことは、英国ナショナル・トラストやグラウンドワークといった市民社会（第三セクター）の存在が社会に大きな影響を及ぼしていることです。日本をはるかに上回る高度な組織力と市民の情熱によって、身近な地域の問題から世界遺産の保全まで、市民が主体となっている取り組みを肌で感じる事ができました。

「都市は都市、地方は地方らしく」という政策のもと、古いものほど価値をもち、もとからある自然や景観の保全と利用の調和のとれたまちづくりを、市民の力によってつくりあげている様を目の当たりにし、日本において地方再生を考える上で打開策になるのではと思いました。

私自身、山梨県出身ということもあり、富士山が世界遺産に登録されて以来、観光客や登山者が増加する一方で、もとからある自然や地場産業など失われてしまうものもあることに危機感を持っています。富士山をどう利用し、保全していくのか、また私たち市民がどのように関わりを持っていくべきなのかをイギリスから学ぶことができました。

地域社会を自らの手で変えていこうというイギリス人の情熱と、継続的な組織運営に魅せられたと同時に、今後の日本における新しい地域社会の課題というものも発見することができました。

また、視察以外の場面でも毎日研修後は自由に時間を使うことができたことは、イギリ

スを違う側面から知り、感じるうえで主体的な体験ができた良い機会となりました。観光地をまわったり、パブで現地の方とお話をしたり、本場のミュージカルを鑑賞したりと、肌でイギリスの社会と文化を味わうことができ、また他大学の学生や、年代を超えた参加者の皆さんとも交流することができ、とても刺激的な滞在となりました。

なかなかできない貴重な体験と充実したイギリスでの研修は、自分自身の国際的視野を広げ、また地元に対しても関心をもつ良い機会となりました。今回得たことを、今後の学生生活に存分に活かし、励んでいきたいと思っています。

今回このようなプログラムを企画してくださった渡辺教授をはじめ、グラウンドワーク三島の職員の皆さま、現地でコーディネート、サポートしてくださった小山さんやロビンさん、その他各視察先の団体の皆様に大変感謝しています。また来年も英国スタディ・ツアーに参加できたらと思っています。今回は、どうもありがとうございました。



2日目に宿泊したホテルの横にある森の中をロビンさん御夫妻に案内していただいている英国スタディ・ツアー参加者



ホテル内にて講義の様子



湖水地方を高いところから見た様子
(目の障害物がない) 素晴らしい景観

(3) 英国ナショナル・トラスト、コッツウォルズ—コッツウォルズを巡って— (担当：植松 宗一郎、太田 裕也)

1) 視察対象の概要

英国ナショナル・トラスト

英国ナショナル・トラストは1895年に発足した民間非営利団体で、イギリス国内の歴史的建造物や美しい庭園、国立公園などを守っていきこうと活動を行っている文化保護協会のことである。現在においては歴史的建造物やイギリス式庭園をはじめとして自然保護区や産業遺構など計550の物件が、英国ナショナル・トラストの管理の下で保全運営されている。

コッツウォルズ

コッツウォルズは農場と石造集落とが織りなす美しい景観を楽しめる地域である。本スタディ・ツアー内においては農村環境の保全と利用との在り方に触れる中でグリーン・ツーリズムを体験した。複数あるコッツウォルズの集落、地域の中で今回はシェイクスピアの生まれた町ストラトフォード・アポン・エイボン、石造建造物の美しいアッパー・スローターとロウアー・スローター、待ちに川がせせらぐボードン・オン・ザ・ウォーター、イングランドで最も美しい村とされているバイブリーを訪問、散策した。

2) 視察地概要

英国ナショナル・トラスト

英国ナショナル・トラストについては、同行指導いただいたロビン・ヘンショウ博士からレクチャーを受けた。英国ナショナル・トラストは、貴族階級が産業革命の頃に行った景観保護の為に歴史的建造物の買い上げ運動が起源である。英国ナショナル・トラストに寄付される建物には贈与税がかからないようにし当時の政策もあり、多くの建造物が英国ナショナル・トラストの保護下に入った。英国ナショナル・トラストが保全に特に力を入れたのが海岸線と湖水地方で、自然資源の豊富なこれらの地域には様々な開発計画の圧力がかかったが、寄付運動や保全活動により守られ、その後湖水地方は国立公園に指定された。

英国ナショナル・トラストは多くの土地と建物とを保有しておりそれが大きな財産であると同時にその維持管理に大きな出費が伴う。その出費は国民からの寄付、会費によって賄われ、会員はイギリス人口の5パーセントを占めるという。

ストラトフォード・アポン・エイボン

シェイクスピアの生まれ故郷として知られるこの町は外国人旅行者だけでなくイギリス人の国内旅行者にとっても人気の旅行スポットである。シェイクスピアの銅像が広場に立

ち、我々がイメージする「ヨーロッパの大通り」のイメージそのままの白壁や石作りの建物が並ぶ。訪問した日にちょうどマーケットやイベントが開かれていたこともあり、町中が朝から大賑わいであった。

この町には船が通る幅数メートルの運河が縦横に通り、現在でも個人の船やカヌーがその運河を利用している。運河沿いの遊歩道はきれいに保たれているが、街を少し外れてしまうと草が少し伸びている地点もあった。

アッパー・スローター、ロウアー・スローター

この二つの集落は前述のストラトフォード・アポン・エイボンや後述のボードン・オン・ザ・ウォーターとは異なり多くの観光客で賑わうというよりは生活空間としてののどかさが保たれている。そのためか大きな駐車場なども少ない印象を受けた。なだらかな斜面にあるアッパー・スローターと平地にあり水路が走るロウアー・スローターとは建造物の雰囲気は似ているものの周囲を見回した時に受ける印象は対照的である。だがいずれも生活感のある歴史的建造物たちが景観を引き立てていた。歴史という付加価値の重みを感じることが出来る。

ボードン・オン・ザ・ウォーター

ボードン・オン・ザ・ウォーターには「オン・ザ・ウォーター」の名の通り川が町中に張り巡らされておりさも実際に水の上に町があるような感動を受けた。歴史的な建物が多く並ぶが比率としては大通りにおいては民家よりも店の方が多い印象だ。しかし大きな看板などもなく景観を壊さないために、にぎやかなながらも美しい景色となっている。川沿いにはレストランや商店が多く並び、そのためかここでは他のコッツウォルズの集落に比べゴミ箱などの設備が多く感じられた。

バイブリー





バイブリーには多くの植物や動物の姿が見られた。周囲の湿地は多くが寄付の上英国ナショナル・トラストによって管理されているという。平地と丘が同じ町の中に存在しているような地形で、散策を楽しむ観光客の姿も見られた。商店は町の中心に1か所あっただけで、そこは多くの人でにぎわっていた。これまでに見た町は多くが観光か住環境かのどちらかに重点を置いていた印象を受けるのに対して、ここでは観光、自然保全、住環境が同じ町の中でも地点によって分けられ、共存していたようにも感じられる。

3) 学習概要

都留文科大学 3年 太田 裕也

感動し、驚いたのは、英国ナショナル・トラストの活動の広さである。観光客などが知らずに一見すれば「きれいだ」で終わってしまう景観でも、よく見ると英国ナショナル・トラストによる管理であると知ると、イギリスの素晴らしい景観はそれを足場で支える英国ナショナル・トラストの存在あってこそだと思う。しかし、多くの土地や資源を保有しイギリスの景観を支えているということは、同時にそれだけの出費を求められるということであり、寄付や会費の額によって活動の質が左右される。人口の 5 パーセントが1つの民間組織の会員になっているということは、それだけ英国ナショナル・トラストの活動が、イギリス国内で評価され、信用されていることの何よりの証明だと思う。

市民1人1人が自分たちの国や故郷を愛し、それを守るために実際に行動に移している例の1つが英国ナショナル・トラストだ。「自分たちでできることをやろう」という考え方が強く現れていると思うし、それぞれが可能な範囲で活動を、あるいはそのサポートをすることで無理なく活動を継続できる。この英国ナショナル・トラストという形は日本の景観、環境の保全にも生かしていけると感じた。

	
シェイクスピアの生家	Lower Slaughterにて 隆起した土地の上にてできた町
	
ボードン・オン・ザ・ウォーターの景色	バイブリーにて 統一感のある石造建造物が並ぶ

(4) グラウンドワーク・ロンドン、バイクワークス

(担当：岡野 英行、中溝 舞)

1) 組織の概要

グラウンドワーク・ロンドン

グラウンドワーク・ロンドンはロンドン全体を対象に活動するトラストである。かつてロンドン市内には 10 か所ほどのトラストが存在したが、現在はグラウンドワーク・ロンドンに統一されている。持続的なコミュニティを目指し、都市景観や環境サービス、雇用や就職に必要なスキルの支援などをテーマに活動している。今回、グラウンドワーク・ロンドンが行っている活動として「TREExOFFICE」と「Mobile Garden City」の二か所を案内して頂いた。

TREExOFFICE

TREExOFFICE とは、ロンドン市内にある公園の木の上に建てられたオフィスであり、このオフィスは一日 15 ポンドで誰でも利用可能である。イギリスでは財政カットにより、年々公共事業に充てられる資金が減少している為、グラウンドワーク・ロンドンではオフィスの使用料を公園の維持費などに充てる考えである。また TREExOFFICE はまだ実験段階であり、公園内には一時的に設置し、今年の 12 月に取り外す予定である。



グラウンドワークによって公園に作られたオフィス「TREExOFFICE」

Mobile Garden City

グラウンドワーク・ロンドンは 2012 年に開催されたロンドン・オリンピックのクイーン・エリザベス・オリンピック・パークに今年の 7 月、Mobile Garden City を設置した。これはクイーン・エリザベス・オリンピック・パーク周辺で暮らす住民などが利用可能なガーデンであり、野菜や果物を作るガーデンとして利用されるだけでなく周辺住民同士の触れ合いの場としても機能している。



「Mobile City Garden」

ロンドン・オリンピック開催地の近くのマンションが立ち並ぶ
クイーン・エリザベス・オリンピック・パーク内に作られた



世界中の様々な野菜や果物が作られている

バイクワークス

バイクワークス(Bike works)は、一般のサイクリングショップと異なり、サイクリングを通して失業者や障害を持った人が職に就けるようにトレーニングを行ったり、廃棄された自転車の修理やリサイクルして新たな製品を作ったりするなどの活動をしている社会的企業である。2006年に株式会社として設立され、その翌年に店舗を構えた。上記の活動以外にも自転車を通して様々な事業を行っている。

また、リサイクルを導入し比較的安価な自転車を提供する、環境にも市民にも優しいビジネスを展開しており、さらに社会的弱者の社会復帰に貢献している社会的企業である。バイクワークスのコンセプトは、リサイクル、雇用の拡大、そして障害者用の自転車開発である。まずこれらのコンセプトについて説明する。

1つ目のリサイクルであるが、バイクワークスは毎週 3000 台もの放棄自転車を回収、修理、加工し、そして市民に安価に提供する。また自転車として機能しないものは その部品のみを商品とすることや、部品を加工し全く別の製品を作るなど、使えるものは全て再利用している。リサイクルを行うことは、市のごみ問題を解決するだけでなく、安価な自転車の提供を可能にし、貧困層の市民にも気軽に自転車を楽しんでもらうことができ、市民の運動不足の解消にもつながっているのである。

2 つ目の雇用の拡大であるが、バイクワークスは失業者の社会復帰に最も力を入れている。トレーニングセンター、宿泊施設を設け、特に社会復帰が難しいとされる犯罪者や麻薬乱用者等を対象とし、年間 300 人もの雇用トレーニングを行っている。そのトレーニングとは時間や規則を守り働くサイクルを身に付けるという一般的なものであるが、バイクワークスが特に大切にしていることは「資格の取得」と「会話」である。勤務時や休憩の間にスタッフや働く仲間と話をすることで、閉ざしていた心を開くことができ、また資格の取得によって社会復帰した際に再び自律し働くことができるようになる。他人と比較し、仕事ができるかできないかではなく、個々の抱えている問題を明らかにし、一人ひとりの成長に合ったトレーニングを行うという確実な教育の在り方が成功のカギなのだろう。

そして 3 つ目の障害者用の自転車開発についてであるが、これはバイクワークスの、みんなに自転車の楽しさを味わってもらいたいという思いに基づいており、ゆえに体が不自由で自転車に乗ることができない人のために自転車を開発している。これは、自転車に乗れた時の嬉しさや楽しさ、不可能が可能になった時の感動が、彼らやその家族に希望を与えるからであり、同時に、バイクワークスのスタッフの原動力となっているのである。

次にバイクワークスの資金運用について説明する。上述の通り、バイクワークスは雇用トレーニングの受け入れに宿泊施設も提供しており、そのため多額の費用が必要となる。非営利団体で活動する場合、資金調達は政府やチャリティーからの援助に頼らざるを得ず、また援助は一時的であるため多額の支出を賄いきれない。そこで収入を自由に使うことができる“企業”に着目し、ビジネスを立ち上げ、その収入で失業者を受け入れようと試みたのである。ビジネスが継続的であれば社会的問題の解決も継続的であり、利益が出るほどより社会に貢献できるのである。社会貢献のため、利益を算出する方法を常に勉強し、常に前進しようとする、バイクワークスの情熱が自らを成功に導いているといえるだろう。

以上、バイクワークスの概要について述べた。バイクワークスの今後の展望は、さらに雇用者トレーニングに力を注ぎ彼らの社会復帰を支援するため、ビジネス拡大を目指している。具体的にはパートナーとして他のいくつかの企業と連携してビジネスを展開していくことが大切であるとしている。

	
<p>バイクワークス： Jim Blakemore 氏から説明を受ける一行</p>	<p>バイクワークスの倉庫の中：ここで、自転車のリサイクル、一般の人向けの修理の講習などが行われる</p>



2) 学習概要

東京農工大学 2年 岡野 英行

初めて TREExOFFICE を見たとき、グラウンドワークの行う活動はただの公共事業の延長ではないのだと思った。木の上にオフィスを作る、これは非常に斬新なアイデアであり一般的な公的機関ではなかなか実行することはないだろうと思う。しかし、ただ斬新さを求めただけのアイデアではなく、公園を維持していくための資金を集めるという目的とそれを確実に計画が綿密に練られているからこそ、周辺の住民や公園の管理している人から理解を得ることが出来たのだろう。

ひとつの地域の中で持続的に活動を行うためには、その地域住民からの支持が重要であり、特に利益よりも社会貢献に力を入れるべき社会的企業にとって、地域住民からの支持とは、すなわち、その社会的企業の評価に等しい。だからこそ常に地元住民が望んでいるものが何なのかを理解し、それに答えなければならないと思った。

今回紹介して頂いたもう一つのプロジェクト Mobile Garden City について。マンションが立ち並ぶ住宅街の中に多くの人々が利用できる菜園を作ったことで普通の家庭菜園では出来ない規模のガーデニングが可能になったり、菜園での住民同士の交流も生んだりすることが出来る。この mobile city garden の近辺のマンションはイギリス人以外にも外国から来た人々が多く、そのような人たちがガーデニングを通して様々な人と喋ったり、一緒に野菜や果物育てたりすることでロンドンの町に馴染んでいく手助けにもなる。自分の住んでいる東京と比べてみると、ロンドンの方が様々な国籍の人が住んでいるように見受けられた。それだけ国籍間の問題も生じてくると思われる。そのような問題もこの mobile city garden が緩衝材としての一翼を担っているのだろう。

菜園がもたらしてくれる効果は上記のこと以外にも、都会であるロンドンに住む人々に作物を作る面白さを伝えてくれることだといえる。ロンドンの土は数多くの土地開発により作物を育てるには難しいものとなってしまった。そこで、Mobile city garden を作ることで都会でも作物を作る機会を与えたのである。Mobile city garden が伝える作物の面白さは大人のみならず、子供たちにも影響を与えるだろう。都会ではなかなか作物を作る楽

しさを知る機会は少ない。そこで Mobile city garden で様々な野菜や果物を育てれば作物を作る楽しさや難しさなど多くのことを学ぶだろう。実際に Mobile city garden は近くの小学校などの子供たちに利用されているのである。

以上のように、Mobile city garden は様々な人に焦点を当てて作られたのである。今後、さらに多くの場所でこのような菜園が増えていけば、より人々がガーデニングを通して他の住民と触れ合う場所が生まれてゆくだろう。

バイクワークスでは環境保護、雇用の支援や障害を持った者の為のプログラムなど多角的に活動を行っている。例えば、バイクワークスは年間に 3000 台の自転車をリサイクルして 1000 台の自転車を売っている。これにより毎年 45 トンの資源がリサイクルされたということになる。その他にも自転車を売った教育で様々な人々の社会的支援を行っている。近年、イギリスでは政府から社会的企業への支援金が減っている中でバイクワークスがこのような社会的活動を行えるのは資金の調達が政府頼みになりきっていないからである。普通のサイクリングショップとしての利益や銀行からお金を借りることで資金を得て社会的な活動も行っているのである。つまり、バイクワークスは社会的企業としての一面と利益を求めた一般の企業としての一面の両方を持ち合わせているのである。たしかに非営利的な活動を持続的に長く行っていくためには安定した資金繰りをする必要があるため、バイクワークスのような経営の仕方は他の社会的企業も見習うべきだと感じた。

しかし、バイクワークスの持つ資本もなかなか厳しく毎年資金の調達には苦労しているようであった。それでも社会的企業として多くの人々を支えていけているのはバイクワークスで働く人たちが自分たちの暮らす町を良くしていきたいという熱意をもってこの活動に取り組んでいるからであろう。

バイクワークスのある町はロンドン市内では比較的治安が悪く、職に就けない人も多く暮らしている為、バイクワークスのような社会をよりよくしていこうとする社会的企業が求められているのである。今現在、社会的企業が持続的に活動していくには厳しい時代であると思うが、今後このような企業が増えてゆくなら、町全体もよりよく変化していけるだろうと信じている。

東京農工大学 4年 中溝 舞

今回の研修で、イギリスの湖水地方や田舎、そして都会を巡り、様々なことに驚き感動した。その中で特に印象に残ったことについて記す。

まず感動したのは景色である。訪英前、私は英国の印象として、ロンドンのような比較的大きなレンガ造りの建物が立ち並ぶ緑の少ない町並みを想像していた。しかし、飛行機の窓や高速道路に出た時の車窓からの景色は私の想像とは全く異なり、見渡す限り野原で沢山の牛や羊が放し飼いにされていたのである。また、田舎の町並みはレンガの家々と自然が調和し、遊歩道や散策ルートは、その地域ならではの植生や生き物を尊重した自然環

境が保たれており、目に映るすべてが本当に綺麗であった。

2 つ目の感動は、英国市民の主体性である。英国の景観を守り維持しているのは行政ではなく「市民の意思」なのである。英国にはかつて開発の影響で景観が失われ地方が衰退する時代があった。これは日本と同様であろう。しかし、ここからが英国の素晴らしいところである。市民自らが立ち上がり、民間非営利団体である英国ナショナル・トラストやグラウンドワークを発足し、歴史的建造物やイギリス式庭園、自然公園を保護、管理すると共に、行政、企業、市民をつなぐ「パートナーシップ」概念を公共政策に導入し、地域再生に尽力していったのだ。現在は、利益全てを市民や社会的弱者のために遣う「社会的企業」も現れ、地域住民と協力して事業を起こし、地域の問題解決に寄与している。

さらに感銘を受けた 3 つ目の感動が、これらの事業を起こすのに必要な資金をほとんど自らの利益で賄うことである。例えば自然を保護する時、一時的に投資して終わりではなく、その維持管理に必要な人やお金等のシステムが機能するような事業を成立させるように工夫している。自然という資源を使い、ツーリズムによってお金を集め、その利益によって人を雇って維持管理を可能にする。こうすることで景観が保たれ、その景観を求めて人が集まり、お金を落としていく。このようなサイクルがしっかり機能しているのである。行政に委ねることなく、自律的、持続的な解決を目指しお金を運用することで失敗も成功もすべてが経験となり、今に至るのである。

最後に、このような活動の根底にあり、私が最も感動したことは、「英国市民の情熱」である。英国市民は常に自分の身の回りにある問題に意識を傾け、それを解決しようとする主体性、自律精神を持つと同時に、それを応援しようとする国民性がある。それは人と人とのつながりを大切にしようとする情熱から生まれるものであり、その情熱が彼らの原動力になっているのである。日本人は「住めば都」と言うけれど、英国人は「住むなら都に」という精神で、今自分のいるところを改善していく。“問題があるなら事業を起こして解決する” “人のために利益を追求する。だからやりがいになる。辛くても頑張れる”。こうした精神があるからこそ、今の美しい英国の原風景が保たれ、建物や自然がより美しく見えるのだろう。

私は英国スタディ・ツアーを通し、本当にたくさんのことを学んだ。今の日本と同じような課題を持ちながら、問題に対する姿勢の違いを感じ、英国のすごさを実感すると同時に、自分の生まれ育った日本の問題を解決するために自分にできることを考えて、しっかり行動に移していきたいと強く思った。何ができるかはわからないが、こうして学び問題意識を持つことができたことは解決への大きな一歩だと感じている。

また、このようにたくさんのことを学び体験することで、多くのことを考えることができたのは、この研修で丁寧に説明して下さった通訳の小山さん、ロビンさん、社会的企業の方々、現地の方々、同行して下さったバスの運転手、企画して下さった GW の方々のおかげであり、心から感謝している。



車窓からの高速道路横の風景
(中溝撮影)



コッツウォルズ地方
(中溝撮影)



英国ナショナル・トラスト保護地域
(中溝撮影)



公園でのボランティア中に見つけた蛙
(中溝撮影)



ストラフォードに住む人の家
(中溝撮影)



ベイクドポテト (ツナチーズ)
アルストン・ムーアのカフェにて
(中溝撮影)

(5) The Conservation Volunteers

(担当：鈴木 大貴、橋爪 亮)

1) 組織の概要

The Conversation Volunteers (TCV、カンバセーションボランティア) は、主に英国内で活動しているボランティア団体である。産業革命以降の経済活動による汚染や自然保護活動の怠慢により、英国内の 1/3 もの自然資源が枯渇している。その現状に危機感を持った TCV は、1959 年からボランティア活動を通じて地域の自然資源を保護する活動を行っている。同時にその活動に参加する人材の育成を行っている。

例えば、退職後に余暇の多いシニア層が、TCV の活動に参加しながら地元の環境改善に寄与している。団体が発展した背景には、1980 年代以降、サッチャー政権が小さな政府を徹底したことにより、英国内各地で市民団体の活動が高まったこともある。現在、TCV は 5 年間で 500,000 人の参加者が活動することを目標にしている。

2) 学習概要

早稲田大学 大学院 2年 橋爪 亮

2015年9月15日、グラウンドワーク三島の視察員はTCVのボランティア活動に参加した。今回はロンドンの北部に位置するリージェンツ・パークにある一角で、清掃活動(草刈り)を団体のメンバーと一緒にいった。実際に団体の清掃活動に参加したことは、団体の活動意義および課題を可視化する有効な時間であった。これまでの視察先では事業者からお話を聞き、メモを取るという受動的な学びが多く、活動実態が十分に把握できない面もあったからである。

約25名の集団で作業に取り組んだ事により、効率よく作業を行うことができた。30㎡ほどの敷地全体に広がっていた雑草を、5時間でほぼすべてを刈ることに成功。また、途中、30分の休憩を挟み、紅茶とお菓子を食べながら作業の参加者と交流を深めることができた。ロンドンの都市部に位置する公園で、このような社会的活動に参加できることは、日本の都市部では少なく、有意義な時間であった。

一方、団体員メンバーとの会話や交流する機会が少なく、単純なボランティア活動になってしまった点は否めない。The “Conversation” Volunteersである以上、通常のボランティア活動よりも、参加者同士が社交性を高めながら活動を行う必要があると考える。

また、参加者の多くが高齢者であり、若年層と交流することが少ない。そのため、メンバーも固定化しており、新たに参加を希望する者が少数または参加しても数度の活動で辞めてしまうという可能性もある。

以上のことから、公園の自然という地域資源を利用して社会的活動を行う、という点では公共性の高い活動を行っている。今後は参加する人々の育成(人材教育)、団体の維持(持続性)をより考慮しながら、団体を発展させる必要があると考える。

都留文科大学 1年 鈴木 大貴

カンパセーションボランティアの現場を見て参加した感想は、行った仕事の内容は 木や変な植物が生えないように原っぱを切ってコンポストにすることと、プラスチックのラインを掘って池にするといったことだ。私たちがやったのは主に原っぱを切ってコンポストにする作業だ。

仕事の際に感じた、現場の雰囲気についての感想は、ボランティア職員と参加者の会話が無かったり、話を聞くと、ボランティアに来る方はいつも来る人ばかりで、ボランティア活動が、ほとんど職業化してしまっている印象があるため、参加者の心のケアや触れ合いを重視しているというよりも効率を重視しているように見えてしまった。障害者や失業者、浮浪者等の心のケアや自然保護のためのボランティア活動なのに、効率重視だと、何の為の心のケア、ボランティア活動をやっているのか分からないと考えた。しかし、tea breakの時は職員やボランティアの参加者が会話していた。また、平日が活動日になっているという点もあるが若い学生が居なかった。

現場に参加した感想はイギリスの道具と日本の道具は違った点があったので作業がやりにくい所があった。特にスコップは日本のものと違いフォークの様な形だったので地面が掘りにくかった。途中で疲れてしまい、鎌で草を切っていくよりも、芝刈機やトラクターを使った方がいいのではないかと思ったが、芝刈機を使わない理由は、ボランティア活動で、鎌で地道に草を刈ったりする人の力を使わないとトラクター等を使ってしまい、そのことによってカエル等の生き物が死んでしまうという問題点があったからだ。

tea break や作業の合間にボランティア参加者の方と話した時、参加者の方は生き生きとしていたので、一見効率重視に見える活動も参加者の方の心のケアになっているように感じた。



	
<p>リージェンツ・パークにて 草刈ばさみを使った作業</p>	<p>熱心に取り組む参加者の様子</p>
	
<p>別のグループは池づくりに挑戦</p>	<p>種類毎きちんと管理されている作業道具</p>
	
<p>Tea break の時の学生とボランティア参加者の様子・記念撮影</p>	

【参考文献】

1. The Conversation Volunteer, Join in, feel good,
<http://www.tcv.org.uk/about/who-we-are/join-in-feel-good>, 2015/10/26 確認

(6) まとめ

(担当：三浦 峻太、山田 喜昭)

1) 視察研修のまとめ

The Conservation Volunteers が主催するボランティア体験活動を終えて、リージェンツ・パーク内にあるレストハウスにて研修のまとめを行った。以下、各人がまとめとして発言した内容を記す。

渡辺 豊博 専務理事

- ・ イギリスの地方においては、地元住民が地元の特性を活かしてソーシャルビジネスを起業している。また、地元復興、地元発意、地元発信を起業の要点としている。
- ・ 湖水地方のように、日本にも多様な魅力的な地域資源がある。但し、日本では風景が連帯・統一化しておらず、この点が、グリーン・ツーリズムの課題となっている。
- ・ グラウンドワーク等の非営利団体であっても、補助金を獲ることもビジネス。そのためには、地域の中で小さな実績・成果を残し、地域評価を上げることがポイントだ。
- ・ ボランティア活動においては、単に作業を行うということ以外にも、野外活動をとおして、参加者同士の仲間作りや参加者の健康増進といった副次的効果も内在している。

阿部 一成・五十嵐 雄大 (アルストン・ムーア担当)

- ・ 日本では NPO はボランティア活動であるが、英国では事業化しており、NPO がビジネスとして確立しているのがわかった。
- ・ 英国では地元愛が強い。

小山 善彦 コーディネーター

- ・ 英国は個人主義の国であり、別に地元愛が強いという訳ではない。今まで受けていた行政サービスを維持するために住民が地域のために活動しているというのが本当のところ。

池田 麗菜・石岡 真由美 (湖水地方担当)

- ・ 当地を案内して頂いたロビン氏との講話において、英国ではキャリアパスが多様化していることや、NPO の運営においてはリーダーシップが重要であることを感じた。
- ・ 湖水地方のような田舎に、大勢の人が訪れており、すごいと思った。

小山 善彦 コーディネーター

- ・ 英国では「保全と利用」を両立しながら、景観を維持している。

植松 宗一郎・太田 裕也（コッツウォルズ地方担当）

- ・ 古いものを大切にする文化がすごいと思った。
- ・ 電柱を地中化するなど、景観に配慮している。
- ・ 心の原風景と思え、すばらしかった。
- ・ またロンドン滞在中に、グラウンドワークという言葉が一般市民にも浸透しており、そのすごさを感じた。

小山 善彦 コーディネーター

- ・ コッツウォルズ地方は景観の保全と利用がうまく回っている典型である。

岡野 英行・中溝 舞（グラウンドワーク・ロンドン、バイクワークス 担当）

- ・ ロンドンは都市部にかかわらず、歴史的景観にも配慮しており、街全体の景観が良い。
- ・ リージェンツ・パークでのボランティア活動においては、スタッフと参加者のコミュニケーションが少なかつたような気がする。
- ・ ロンドン市内ではタバコの吸い殻のポイ捨てが目立った。

小山 善彦 コーディネーター

- ・ リージェンツ・パークでのボランティア活動においては、今回私たちが参加していたので、単に普段と雰囲気の違い、会話が少なくなってしまったと思う。

鈴木 大貴・橋爪 亮（The Conservation Volunteers 担当）

- ・ 社会的企業のイメージが清貧でなく、ビジネスであることを感じた。
- ・ 英国では古い物に対し、高い価値観を持つ国民性を感じた。
- ・ 日本でも今後、若者が NPO に就職できるような雇用環境が整ってほしい。

小山 善彦 コーディネーター

- ・ 英国・日本においてもパッションがある人が挑戦できる社会になってほしい。

三浦 峻太・山田 喜昭（研修のまとめ担当）

- ・ 今回の研修では NPO ビジネスを学ぶことができた。また事業が持続しており、良いと思った。
- ・ NPO やソーシャルビジネスの分野において、英国は日本より先行しているが、国民性や文化的な違いもあるので、英国のやり方をそのまま取り入れても難しいと感じた。

小山 善彦 コーディネーター

- ・ 英国と日本との制度などに相違があるので、その点は考慮が必要である。

小島 恵 都留文科大学講師

- ・ 英国では、地域おこしにおける「協働と自立」、景観保全における「保全と利用の両立」の概念が基本となっている。また英国において、このような活動資金源として、宝くじの存在は大きいと思う。

山本 実生 グラウンドワーク三島職員

- ・ 英国における社会的企業概念について理解することができた。
- ・ 英国人の美観意識や美意識のすごさを感じた。
- ・ ファンドレイジング(募金の集め方)についても興味深かった。

以上が、各参加者によるまとめです。

2) 学習概要

都留文科大学 3年 三浦 峻太

イギリスと日本は文化をはじめとして多くの違いがあり、一概にどちらの国の方が良い・悪いということではなく、お互いに参考にするべき点があるということを実感することが出来た研修であった。イギリスにおいてはひとつに市民社会であるということが大きくチャリティー活動など自主的な活動が盛んであることに繋がっていると考えられている。日本はイギリスのように市民社会が発達しておらず、同じ仕組みを利用しても得られる効果や影響は小さくなることが予想されるが、イギリスを参考にした日本独自のシステムを作り上げることでより影響力のある体制が構築できると考える。地域に足りないものがあれば自分たちで作り上げていけば良いという精神や地域への誇りや感謝から多様な地域貢献活動を行うことなどイギリスから学ぶべきことは多く、今後もイギリスでの先進的な環境改善活動に目を向けていきたい。

山田 喜昭 社会人 (一般参加者)

今後日本では、急激に進む少子高齢化、社会保障費の増大や税収不足により、今まで通りの行政サービスが維持できない社会が遠くない将来にやってくることは必至であり、従来の行政サービスを補完するために地域コミュニティやNPO、社会的企業等のセクターの役割が拡大し、重要度を増してくるのだと思う。

イギリスでは、約30年前からNPO等のボランティアセクターに行政の役割を委譲しながら、段階的に小さい政府に移行を図ったとのことで、今回一週間という短い期間であったが、実際にイギリスに足を運び、実情を見聞きできたことはたいへん有益であったし、

未だに試行錯誤を続けていることを感じた。

国民性や文化的価値観が違うため、イギリスでのやり方をそのまま日本に導入しても難しいと思うが、大きな変革を行う場合に生ずる既得権益層との軋轢への対処、合意形成の進め方については、たいへん参考になると思われ、これらの理解をより深めるためには、1980年代のサッチャー政権から今に至るイギリスの政治的背景も読み解くことも大切であると感じた。



広大なリージェンツ・パーク全体図



パーク内道路の様子



リージェンツ・パーク内にあるレストハウスにて研修のまとめの様子

6. 英国スタディ・ツアーに参加して

(小島 恵)

今回、本学の渡辺豊博教授のご厚意により、グラウンドワーク三島主催の英国スタディ・ツアーに参加させていただいた。環境法を研究対象とし、大学で講義をしている身であるにもかかわらず、恥ずかしながら私にはフィールドワークの経験がほとんどない。フィールドワークの重要性については、渡辺教授をはじめとする専門家の方々との対話からはもちろん、私の講義を受講している学生とのやり取りからも日々感じてはいたものの、時間的制約や機会の僅少を言い訳に取り組んでこなかった。そのような私にとって、今回のスタディ・ツアーへの参加は非常に意義深いものとなった。

ツアーから得た知見は多岐にわたるが、特に興味深かったのは英国における社会的起業の成立背景や運営状況である。縮小する行政サービスを代替するものとして、あるいは貧困や環境保全といった社会的な目的のために、地域の需要から興されるものでありながら、慈善事業では決してなく、あくまでもビジネスであること。協働 (cooperation) と自立 (self-reliance) を旨として、地域の経済の活性化のために、そこに住む多くの人を巻き込んでいくこと。いずれも英国の社会情勢や英国人のメンタリティーに由来するところが大きいと思われるが、日本と比較した場合、特に市民の主体性という点での彼我の格差には驚かざるをえない。

そして、そのような社会的企業を「持続可能」なものとするためには資金確保と人材の育成が何よりも重要であるということが、研修でお会いした方々の話から痛切に伝わってきた。私が携わる法や政策が彼らを支援できるとすれば、資金確保や人材育成のための仕組みづくりをすることであろう。法や政策はフィールドで汗を流す人に対して具体的な支援をすることが難しいことを痛感していた私にとっては、みずからの研究が持ちうる社会的意義を違う角度から感じられた研修であった。こうした研修を催行して下さった渡辺教授をはじめとするグラウンドワーク三島のスタッフの方々、特に準備から研修を通じてあらゆる配慮をして下さった山本実生さん、通訳や解説をして下さった小山さん、ヘンショーご夫妻、研修先の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

7. 参加者へのメッセージ

(小山 善彦)

皆さん、英国での研修お疲れ様でした。今回の研修では湖水地方やコッツワルド、Alston Moor など、農村部が中心となりました。英国の市民社会セクターは、とくに農村地域の保全に大きな役割を果たしていますが、その象徴ともいえる英国ナショナル・トラスト活動を、湖水地方で実感できたのがよかったと思います。

皆さんの報告にもあるように、英国ナショナル・トラスト運動は 1895 年、3 人の市民によって開始されています。市民から浄財を集めて景勝地などを買取り、現在および未来世代のために永久に保全する。そこには政治や行政が入り込む余地はないわけで、市民の思いや願いを、市民だけの力で次世代に継承できているところに素晴らしさを感じます。

このトラスト運動は湖水地方で大きく開花したわけですが、その背景にはピーターラビットを生み出したビアトリクス・ポターの存在がありました。彼女は湖水地方の景観をこよなく愛し、そこからインスピレーションを得て絵本を描きました。そして 1935 年に亡くなったとき、所有していたすべての農地と農場をトラストに寄付し、「農家に安い貸借料で貸すこと」「Herdwick という土着の羊を飼いつづけること」という 2 つの条件を付けたそうです。

今回はウインダミア湖近くの高台に上り、360 度のパノラマを体験しました。あの素晴らしい景観のかなりの部分はトラストの所有でしょうから、皆さんが高齢になって訪問されても、あの時のままの景色を楽しむことができるはずです。

「社会的企業の町」の称号を与えられた Alston Moor という田舎町への訪問も、今回の研修で強く印象に残りました。これといった産業もなく、地方都市からは遠く、冬場には孤立し、公共交通もなく、政府補助金はカットの連続。しかし、地域には強いアイデンティティがあり、互助の精神も強く、素晴らしい景観とともに、長距離遊歩やサイクリングを楽しむ人の流れがある。

この地に社会的企業のモデルが根付いたことで、地域の状況が大きく変わりつつありました。現在では約 20 の社会的企業で 50 人以上が働くそうですが、「地域にニーズが発生すると、住民はそれをビジネスで解決できないかと考えるようになった」とのことで、このことが重要な成果だ、という話が印象的でした。

今回はロンドンでも Bike works という社会的企業を訪問したわけですが、Alston Moor の場合は町全体が社会的企業でネットワークされるという形が生まれており、大きな可能性と潜在力を感じさせてくれました。もちろん、収入はそれほどではなく、パート雇用も多いのですが、それで可能になるライフスタイルさえあれば、農村地域再生にとって魅力あるモデルだと感じました。

今回も、報告書の中に込められた、皆さんからの数々の力強いメッセージを拝見しました。日本では市民社会力を開発し、発揮させる余地は非常に大きいと感じています。問題

はそれができたときに、どのような社会になるかのイメージがしづらいことでしょう。短期間ではあったわけですが、英国を見聞された今回の皆さんの実体験が、その一助になることを期待しています。どうぞ頑張ってください。

8. 講評

(渡辺 豊博)

英国に行くためには、飛行機代や宿泊費、旅費、飲食代など、30万円近くの経費が必要となります。今回の英国視察の参加者の多くは、都留文科大学を中心として東京農工大学や早稲田大学の学生たちでした。資金的な負担は、かなりのものがあったと思いますが、そのプレッシャー以上の成果や刺激を得ることができたのではないかと推察しています。

しかし、参加者は、この制約・ハードルを、アルバイトやサークルの日程調整、両親の理解取得などを行い、乗り越えてきたと思います。各人が報告書の学習概要で述べているように、英国での雰囲気や先進性を感じ、学び、国際的な観点からの刺激も受けています。彼らの参加の決断と問題意識、勇気に敬意を贈りたい。

今後、この参加の決断が、それぞれの今後の人生の中で、貴重な経験知・体験知として、何かしらの効果と影響を発揮してくれると確信しています。また、英会話への抵抗感の払拭を含め、社会的な視野が国際的になり、行動範囲や関心事が大きく飛躍し、拡大していくことを期待しています。

英国の国家運営のしたたかさや戦略性、NPOとの協働の仕組みを拡大することによる効率性を追求する行政や政治の狡さ、地域を運営する主役は市民だとの自信とプライド、真の市民社会の補完システムの有益性など、少子高齢化の問題を抱え迷走する日本の社会問題を解決していくための先進的な対応策・対策・方向性を学べたのではと考えています。

今後は、この刺激と知識を、いかに劣化させず、持続・維持させ、自分の潜在的な知識として、実社会の中で活用・応用していけるかが、参加者の課題・宿題といえます。今後の参加者の活躍と発展を強く願います。本当に、ご苦労様でした。

右足の痛みを発症して十分に歩けなかった渡辺より。